

## 令和2年度第3回行政評価委員会（人づくり・地域づくり部会）会議録

### 1 開催日時

令和2年9月11日（金） 午後3時30分～午後5時15分

### 2 開催場所

生涯学園都市会館 3階 第3中ホール

### 3 出席者

#### (1) 委員 6名

市島宗典委員（部会長）、高橋利光委員、高橋英明委員、藤田甲之助委員、菊池房江委員、高橋久美子委員

#### (2) 説明者（施策主管課及び関係課） 1名

生涯学習課：佐々木正晴課長

#### (3) 事務局（施策及び事務事業担当課） 2名

秘書政策課企画調整係：瀬川千香子係長

秘書政策課企画調整係：菊池絵未主査

### 4 議題及び報告事項

市が実施した施策評価のうち、花巻市行政評価委員会の評価対象施策である「自主的学習の推進」について評価を行った。

#### (1) 施策主管課による説明、質疑応答

#### (2) 委員会の評価結果集約

#### (3) その他（第2回委員会時の質問の回答について）

### 5 議事録

#### (1) 施策主管課による説明、質疑応答【主な意見・質疑等】

高橋利光委員：読書活動について、行政の方のみでなく、学校の関わり方、あるいは学校の図書館の活動の関わり方もあると思うが、連携の仕組みはどうなっているか。

佐々木正晴課長：各学校に学校司書担当の教諭がいて、図書館も関係しながら研修会を行っていると思う。学校教育課に配属されている学校図書館支援員の先生が各学校図書館の支援をしながら、各学校の司書や図書館と連携して学校図書の実質、読書活動の普及を行っている。

高橋利光委員：その前提が密な仕組みであると思うのだが、もっと密になってブックスタートやブックスタートプラスなどの事業につながって広がっているものなのか。

佐々木正晴課長：ブックスタートやブックスタートプラスは各地域の保健センターと連携して事業を進めている。そのほかの読み聞かせ事業など連携はできてはいると思うが、そこが密かと言われるとなかなか難しい実態だと思う。

高橋利光委員：もう1つ。図書館の話があるが、人口減少や、今の人達が悪いことではない

が、コミュニティ能力の衰退がよく言われているが、社会教育のあり方について、「現状と課題」の部分で、あまりにも広すぎる言い方で申し訳ないが、これから何が必要かということはあるのか。

佐々木正晴課長：なかなか難しいところ。図書館については、現在、図書館の研究をされている富士大学の先生とタイアップをしながら、図書館の中身について話し合いを行っている。個々人のスキルアップに資するものが図書館にはあると思うので、蔵書やサービスを充実させることが必要と思う。社会教育も同じで、そういった部分が必要という共通認識はある。社会教育は、現役世代が社会教育に関心をもって取り組んでいるかは難しい。シニア世代を対象とした高齢者学級などのウェイトが大きいため、現役世代やさらに若い世代を対象に生涯学習課として昨年度あたりから少しずつ取組を始めている。例えば、SNSでの応募や若者向けの講座開催などをして関心をもってもらう取組をしている。固定した世代に社会教育が定着するのではなく、もっと広い世代にお知らせしていくことが社会教育の普及につながると考える。

高橋久美子委員：生涯学習講師の登録者数が昨年度は14人ということで、成果指標の達成度が「a」になったということだが、生涯学習講師は自主的なボランティアであって、なかなか経験のない人は教えられないと思われ、また、全て準備万端に作ってきて知らない人達に教えるということで、講師の方達も苦労されていると思う。このような講師を増やしたいのであれば、市として市民のニーズを探り、どういう講師を必要としているのか調査をして講師を要請するような講座を作り、指導することも考えた方がよいのではないかと。

佐々木正晴課長：貴重なご意見だと思う。現在は生涯学習の色々な講座を行っている中で、講師になっていただけるスキルのある人をピックアップしてお声がけすることを昨年度位から行っており、実際講師の方が増えている。講座を行って講師を増やすなどの取組には至っていないが、少しずつ取組を行っている。

菊池房江委員：読書活動推進事業で、読書おもいで帳の発行をされているようだが、これは各小学校で発行されていると思う。その時に、例えば自分の学校の図書館だけではなく、市外の図書館でもおもいで帳が使えると、一生にその履歴が続いて子どもにとっても達成感があり、財産になると思う。この事業を発展させていく時に、他の図書館等との連携も視野に入れて、広域にできるとよいのではないかと。例えば紫波町の図書館はよその人達も受け入れて本の貸出を行っている。紫波町や北上市などでもおもいで帳を活用できるようにできたら、成果指標の図書貸出数の実績値が3.3冊と出ているが、広がりが生まれるのではないかと。

佐々木正晴課長：これも貴重なご意見でありがたい。読書おもいで帳は各学校ではなく、市立図書館で専用の印刷機械で発行している。市外の図書館でも読書おもいで帳が使えるようにするためには、自治体それぞれがご理解いただき導入いただく必要があるが、まだハードルが高い。例えば、県立図書館などの蔵書は、花巻市立図書館でも検索して借りることができる。

菊池房江委員：花北法人会の女性部会が担当して北上に読書おもいで帳を寄贈した際に私も仕組みを見てきたが、学校内だけではなく色々な図書館で読書おもいで帳は活用できる

という記載があったので、花巻市も対応できるのではないかと思った。

佐々木正晴課長：学校図書もシステム整備をすれば取組ができる状況だが、現時点では学校図書は市立図書館のように体制が整っていない状況なので、今後の取組による。

高橋久美子委員：図書館の件だが、私も時々行くが、花巻市の図書館は魅力がない。CDも10年前のものがあったり、いつ行っても同じ本しかない。広さなどもあるのだろうが、歴史的な価値のあるものや絶版になったもの、本屋で手に入らないものは図書館にこそ置いていいと思う。また、私達の歳であれば大型本や、戦前の花巻市の地図を見たくてもなかったりするの、もう少し資料をそろえてほしいと思う。狭い部分もあるので新しい図書館ができることを期待しているが、頓挫して元に戻ったようだ。昨日の市議会中継でもやっていたが、場所はどうか。新たに場所探しからやるのか。

佐々木正晴課長：当局の方で提示している場所はこちらになると断定はしていない。あくまでもここに建てると理想的だという形でお示ししている。現状として市議会と理解がくい違っている状況。まずは市民の皆様にご覧いただき、浸透・理解していただいた上で進めなければならないと思っている。現在開催しているワークショップの中でも場所は限定しておらず、利便性を含めてどういった所がいいか皆さんから意見をいただいている。結果として市が建てたいと考える場所と合致する所があれば一番よいが、ご意見をいただきながら決めていきたいと考えている。花巻図書館は確かに古い改修できておらず、開放していない書庫もあるので、きちんとした管理を行っていく必要がある。一関市の図書館は合併して全部で8館あるようだが、花巻市の数倍の予算をとっていると聞く。新しい図書館が動き出した際には、充実したサービスを提供できるとよい。

高橋久美子委員：具体的に何年度に建築するかということまでは決めているか。

佐々木正晴課長：新花巻図書館複合施設整備構想を今年の1月に示した際には、大体の目安を示していたが、現時点では、実際何年になるかは見えない状況である。

藤田甲之助委員：思っていることと違うかもしれないので、確認も含めてお伺いさせていただきたい。「生涯学習の推進」の中に「自主的学習の推進」という施策があって、全てが図書館に関わることでもないと思っている。例えば「はなまき！おもしろ探検隊」は、花巻市としての情報資源と人材をつなげるための支援だと思う。あとは、自主的学習のあり方といっても、例えば担い手の育成をしたいのか、お客さん目線での成長を図りたいのか、どういう方向性で進めているのか考えた時に、「現状と課題」が大きく書いてあって、「主な取組」もとても広いが、成果指標が「人」と「冊」でしか図れていないことに疑問を感じる。目標数値は私の勉強不足な所があるが、これから求められるものとして、例えば「包摂性」「インクルーシブ」「ダイバーシティ」などが挙げられる。今までの事業を踏襲していく、1つの事業に変化を加えるということだけにとらわれすぎているような気がする。事業は5年、10年大きく変わっていないが、社会の方が3年、5年早く変わりすぎてしまっている。魅力がないという話も先程あったが、子ども達の立場になっていない。大人目線の事業になっているから子ども達のはなれている訳で、そういった部分の検証も、新規登録と言われても登録者の年齢も書いていない。事業のための検証でしかなく、現状と課題、目的達成に向けた検証なのか疑問に思う。もっと言うと、これを作っている職員の方々が本当にワクワクしながら、この地域をよくしたいと

本気になってやっているのか、楽しんでいるのか。さらにいうと、そういう風にしてしまうこのシステムもよくないのかなと感じる。あくまでも、今日は施策評価シートに対しての施策評価検証会なので、事業に対してものを話さなければいけないと思うが、そこでは解決されないような気がして、たどっていくと、そういう虚しさを感じる。図書館の建設の話をする場では正直ないと思っていて、この事業に対する評価・検証をする場と思っているが、図書館の案件があのようにになっているのもそういうところにあるのではないかと。正直、この事業で検証してと言われるのは、この成果指標では0点。行政の皆さんは、数字出しは上手だが、背景や目的、展望のとりかた、検証の仕方、パブリックコメントとアンケート、発信もSNS、ホームページに頼りすぎ。昨年までの事業を踏襲して、実施して、ベースにたどりつくまでが大変で、それをやればやったという検証でしかないから、事業の検証になってしまうと感じる。何年か前に作った計画ベースの話になるのかもしれないが、この単体の事業だけで評価となると、どう評価しているのかというのが正直な思い。

佐々木正晴課長：答えづらい部分。新しい成果指標を考えた時に、正直たどり着いていない部分があると感じる。事業は確かに同じことを踏襲してやっている部分もあるが、生涯学習課は若い職員が多く、同じ事業だけやっている訳ではない。SNSすらも使わないで街にチラシをまいたり、駅においでもらったりして若者向けの事業を周知し、ちゃんとした人数で参加いただいている。なかなかシートには表しづらいが、中身を変えて取り組んでもいる。シートの作り方にも工夫が必要だということは、お話を受けて感じる。

藤田甲之助委員：発想の大きな転換というか、事業を変えていく視点も必要と思う。若い職員も頑張っていると思うが、やらされている感が見える。楽しんでいたら、もっと自分達がやった検証を出してしかるべきだと思う。見えないのがとてももったいない。つまんでつまんでの会話だといつまでもループした会話になってしまうので、答えはでないと思うが、しぼった形での事業展開がよいと感じた。

高橋利光委員：私も藤田委員の意見には同感である。最初に人口減少など面倒な話をしたが、結局ここにそういうものが見えない。それが1枚のシートの集約されている。他の委員もそう思っていると思う。職員の皆さんはやっていることがいっぱいあって、大変なことやっていると感じる。ただ、みんなが報われるための元気な取組、そして感動してもらってつながりをもつというようなことがここにあればよい。あとは、前回も話したが、例えば取組をしなければならぬ時の「～の支援」や「～の推進」、「～を図る」という文言があるが、禁句な言葉。結局やる・やらないどっちなのか、その言葉尻がとても気になる。今回に限らず、この資料全部がそのような印象を受ける。

市島宗典委員：それについてはこの後意見交換させていただきたい。

高橋英明委員：皆さんが言ったとおり。短時間で検証していくことが正直難しい。資料を見ただけでも難しい。今回の趣旨とは違うかもしれないが、本来もう少し時間をかけるべきではないか。意見するのも難しいところがある。思ったことは、藤田委員や高橋委員が言ったようなことと同じである。

高橋久美子委員：新図書館整備アドバイス業務に4,931千円予算が計上されているが、その業務はどのようなものか。

佐々木正晴課長：新花巻図書館整備構想という話をしたが、花巻市の市当局として、図書館として作るだけではなく、駅前の活性化を図るために多目的な施設としてやっていきたいということが方向性としてあったので、それについて実際に施設の複合化について実績がある所にアドバイスをいただきながら進めるということで昨年度は進めたが、その際の業務委託料である。

高橋久美子委員：去年はアドバイザーの意見を聞いてある程度考えて、今年は市民の意見をさらに聞いて考えるということか。

佐々木正晴課長：昨日の市議会の質問もあったが、今年度についても、そういった部分の予算化を進めたいと考えていたが、議会と調整できずに、そこはゼロベースになっている。

高橋久美子委員：以前にも市民から図書館アンケートをとったことがあると思うが。

佐々木正晴課長：新花巻図書館の基本構想策定の際に図書館で従来から取っているアンケートを参考にしたものだと思う。

高橋久美子委員：そのアンケートを見たことがあるが、辛辣というか多くの意見が出されていたので、さらに市民から意見を聞くのは重複するのではないか。

佐々木正晴課長：新花巻図書館整備基本計画の素案を策定するために、こちらの説明や市民のご意見をいただく部分が足りないというのが現在の花巻市の考え方である。

高橋久美子委員：いろんな方の意見があると思うので、集約するのは難しいと思うが、私達としては議会の承認を受けられるような図書館構想をお願いしたいと思う。

市島宗典委員：成果指標の生涯学習講師新規登録者数について、講師の新規登録者数にしている理由は何か。生涯学習がどの位活用されているのか、講師が何人いて何人活用されているのか、市民がどれ位参加しているのかではなく、なぜ新規登録者なのか。

佐々木正晴課長：講師派遣事業で、実際に登録している講師を派遣した回数は357回。それに対して受講いただいたのが7,233人。なぜ新規登録者数なのかは、生涯学習講師は毎年同じではなく、勇退される方も新規登録される方もいる。新規登録者数を成果にすることにより更新が図られる。登録されることが1つの成果と考えて定めている。

市島宗典委員：もう一点。「市民一人当たりの図書館貸出数」で、「3 成果指標の達成状況」のところに「特に大学生世代（19歳～22歳）の本離れが進んでいることが要因」とあるが、何か結果はあるか。

佐々木正晴課長：全国的な調査を資料として調べた上で掲載している。

市島宗典委員：印象としては大学生世代に限らず、全世代として下がっている印象があるが、そうではないか。

佐々木正晴課長：令和元年度は全体が下がっているが、花巻市の市民一人当たりの図書貸出数を見ると、小学校や中学生や一般世代についてはほぼ横ばいで、大学生の世代が落ち込んでいるという分析をしている。

## （2）委員会の評価結果集約【施策評価検証シートの整理】

- 「◎前年度評価の振り返り」の「反映状況」について  
（特に意見なし）

● 「3 成果指標の達成状況」の「達成状況に関する背景・要因」について

高橋利光委員：「60代前半でのシニア大学入学者も減少傾向にある」とあるが、講師の登録数を成果として指標に出したということなので、成果が「a」なのだと思うが、講師が増えてもシニア大学入学者が減少することには比例はしなくてもいいと見える。目標達成するためには講師を増加させるためということでのよいのか。

市島宗典委員：講師の新規登録が増えたとして、入学者が減少傾向にあってもよいようにとらえられる。

高橋利光委員：アンバランスである。みなさん勉強しましょうというのが重点であって、講師を集めることが重点ではない。

菊池絵未主査：シニア大学を卒業された方が講師になる可能性があるということで、減少傾向も講師の登録者数につながる意味合いがあるということで書いていると思う。

藤田甲之助委員：それは補足資料でいい。手法に書いていただくもので、目的と検証に盛り込むものではない。それが目的ではない。

● 「4 施策を構成する事務事業の検証」について

高橋久美子委員：生涯学習活動支援事業で「増やすための工夫が必要となっている」とあるが、工夫の具体的なものが書かれていない。どういう工夫をするのかまで踏み込んで書いていただきたい。

高橋利光委員：新たに取り組むべき事業については、いつまでにという期限はなくてもよいものか。

市島宗典委員：とりかたとしては次年度に向けてということである。

瀬川千香子係長：将来に向かってだが、おっしゃっていただいたように、いつからなどより具体的にあるのであればそのように書いた方がよいので、ご意見としてはとてもありがたい。

高橋利光委員：場所などはこれからなのだろうが、いつには建設するために、いつまでにワークショップをするなど時系列があればよい。

瀬川千香子係長：行程のようなものがあれば、PDCAが回っているというのも確認しやすいので、本来であればそこまで書けるとよい。

● 「5 施策の総合的な評価」について

高橋久美子委員：課題が全て「工夫が必要となっている」という風にしてある。どういう工夫が必要なのか具体的に書いてもらいたい。また、「4 施策を構成する事務事業の検証」にも「ワークショップ等」とあるが、その「等」はアンケートなのか懇談会なのか、何なのか。もっと具体的に書いてほしい。

高橋利光委員：「今後の方向性」にある「検討」も、具体的な内容が必要ではないか。

● シート記載内容全般について

藤田甲之助委員：「3 成果指標の達成状況」の成果指標の2つ目にも見て取れるように、事業の継承というよりもコロナの話になっていたり、若い世代の本離れが進んでいるとあ

るが、逆に現状と課題に盛り込んでもいいようなことを書いている。工夫が必要という状況が分かっているながら、それを背景にもってこない。この事業を見ると本気になってやっているように見えない、やっつけてやっているようにしか見えない。結果、事業をやって終わりになるので、最後の検証が「工夫」に逃げていると結び付けられる。これがもし私の法人でも出てきたら、返してもう一回直させる。先程言ったとおり、0点。そして、自分だったらもう一回見る時間をつくる。そう思う位ひどいと思う。

高橋利光委員：「現状と課題」の中には、日本全国でいわれている人口減少や、10年後の課題を入れる必要があるのではないか。

市島宗典委員：事務局に確認したい。これは中期プランに書かれていることがそのまま掲載されていると思うが、中期プランに記載する時にどのように決まるか。

瀬川千香子係長：これは第2期中期プランで、H29年度から昨年度までの3年間のプランの抜き出しになる。H28年度にプランを策定した当時の課題になっている。社会情勢の変化についていけない部分があると思う。例えば、令和2年度からの第3期中期プランを現在策定中だが、それまでの施策評価をもとに現状は当然変えている。評価から反省を活かして今後の課題を出し直している。関係機関と意見交換、普段の業務の中での気づきも含めて課題を更新している。この施策については、新しい課題として若者向けといった部分での周知方法の工夫が必要とより具体的に書いている。

菊池房江委員：まなび学園祭を見て生涯学習に取り組んでみたい人達への周知方法について、例えば作品の前でギャラリートークなどを行って、素材や手法を広く周知するなど一歩踏み込んで課題を解消するようなやり方をしていくと発展的に先が見えるのではないか。工夫のための切り口を少し研究して中に取り込んでいけるとよい。

市島宗典委員：他に気づく点があれば、事務局に寄せていただきたい。それを反映させた形で最終回に臨みたい。

### (3) その他（第2回委員会時の質問回答について）

菊池絵未主査：前回の部会で高橋久美子委員から就学援助で辞退をする人数について質問をいただいたが、こども課から回答を預かっている。特別支援学級に通う子どもがいる世帯も障がい要件で就学援助に該当するが、所得により申し込まない世帯もあり、その場合に「辞退」という表現を使う。高橋委員がおっしゃっていた、申請したが辞退したという、「取下」という扱いでの件数はないとのこと。